

# 震災後の福島・白木次男の総合学習実践と「生活綴方」・学級文詩集 —原発災害のなかで、地域の生活現実を書き綴らせることの意味—

土 屋 直 人\*  
(2017年2月15日受理)

Naoto TSUCHIYA

Tsugio Shiraki's Educational Practice of the Class Anthology "Life Composition" as Integrated Study at  
Fukushima(Minami Soma City) Elementary Schools during the Nuclear Disaster

## 1. はじめに

本稿は、福島県・浜通り地域において長く生活綴方・作文教育実践に取り組んできた小学校教師・白木次男氏（1955～、以下敬称略）の、3・11震災後、津波・原発災害を各々に被った子どもたちと地域の現実に向きあってきた、南相馬市での教育実践の歩みに着目し、特にその「総合学習」（総合的な学習の時間）の実践、「生活綴方」（作文教育）、学級文詩集を通した実践の実際、その背景・経緯の一端を、白木の教育実践記録の記述と語り（聴き取り）、学級文詩集や子どもの作文等から確かめようとするものである。ここでは白木の、南相馬市立石神第一小学校第5・6年学級（2013・14年度）での総合学習、学級文詩集の作文や構成劇発表等の内容の具体や展開について、諸資料等を引用しながら確かめ、その営みの中で、生活綴方教育実践の持つ意味、総合学習と学級文詩集実践とのつながり、白木の教育実践への思念（意思、意志）、等々について、その実像の一側面を探り、その特質・意義を考察することを試みたい<sup>(1)</sup>。

（なお以下、本稿中では、引用文中を含め、児童の実名は、一部を除き仮名に改め匿名とした。）

## 2. 2011・12年度、実践への思念

### (1) 作文「あの日からのおくりもの」、そして『「あの日」からの問いかけ』

2011年3月11日当時、白木は南相馬市立原町第一小学校に勤務。原発爆発の直後、約3/4の子どもが避難・転校していった。津波被災と喪失感・無力感、「死の灰」の怖れ、先の見えない不安と苛立ちを抱えながら、同小は鹿島小に間借りし、不安のなか、4月22日に学校が再開。同年10月に原町に戻った。2011・12年度、白木は教務主任で、5・6年学級に理科専科として入っていた。3・11直後頃の白木の、折々の教師としての思念の実際、2011年度の教育実践の経緯と具体等については、氏の著書『それでも私たちは教師だ—子どもたちと共に希望を紡ぐ—』（2012年7月）に詳しく記されている<sup>(2)</sup>。同書には、6年生の石田かおりさんが書いた作文「あの日からのおくりもの」（2011年9月）、その作品の読み合いの授業の実際、被災体験想起と「表現」の意味、共有と「浄化（カタルシス）」、等々のことが記録されている。

その過程で、白木が最も大切に考えてきたのは、「分かりあえばきっと力になる」ということだったという<sup>(3)</sup>。

\* 岩手大学教育学部

白木は2016年3月に定年退職する直前、雑誌『作文と教育』に、2015年8月～12月に4回にわけて長編実践記録を寄せている。その連載第一回、『『あの日』からの問いかけ』という見出しの箇所、氏は振り返ってこう記している。

…(略)…地域の崩壊とふるさとの喪失。この厳然たる現実が目当たりにあった。この中にあって、石田さんに『『大震災さえなければ。』私はこの言葉を何度も口にした。けれど今は、その言葉を口にしない。大震災からおくりものをもらったような気がするから。』と言わせたのは、余りにも理不尽で悲しいことではないか、とずっと考えていた。そしてこのかおりさんらが主権者、そして当事者になるまでに、何が為せるのかを追究していくことが、石田さんの間に答える、大人、教師としての責務であるように思ってきた。

…(略)…

そう、今あの日が問いかけているのは、…(略)…子どもたちの声に聴き、「人がひとらしく生きること」「いのちを慈しむこと」を大前提とした社会や教育を考えていくことでなくてはならない。それには、地域の現実や、人が人らしく生きること、それを妨げることも含めて学びながら、生きることへの真実に少しずつ近づいていくことではないか。なかでも、地域崩壊、喪失という現実にあって、不安や悲しみ、やっと見つけ出した喜び等を共有し合っていくことではないか。<sup>(4)</sup>

ここには震災後、『『あの日』からの問いかけ』への応答として、地域の現実に関心や不安や悲嘆を共有することに向かう教育実践を切り拓くことへの心意と、展望が示されている。

## (2) 〈生活現実の「捨象」〉への抵抗、「社会科学としての切り口」

この頃白木は、「原発を学ぶ意味」、「原発と原発事故」の学びの質について、明確な視座と問題意識を持っていた。2012年1月発行の教育雑誌では、放射線教育への行政施策の問題点等を述べた上で、こう記している。

いま、子どもの身の上で起きている甲状腺被曝などの不安や怖れ。子どもの身のまわりで起きている地域崩壊や家族離散の悲しさや苦しきなど、これら生活現実を捨象した学習では意をなさない。

さらに『どうして原発がこの福島にあるの？なくてはならないの？』という素朴で根源的な問いに、社会科学としての切り口もたなければ、原発とこ

の原発事故の真実を本当に学ばせたことにはならない。<sup>(5)</sup>

この文は実際には2011年の末頃に書かれたものと推察される。生活現実の「捨象」への抵抗の精神、学びにおける「社会科学としての切り口」の必要への、既に明確な意思があった。

また白木は、2012年6月発行の教育雑誌の「福島原発事故の真実を教える意味」という論考の中に、こう書いていた。

福島でいったい何が起こったのか・起きているのか。原発の技術そのものが未確立で、ひとたび事故が起こると取り返しのつかない事態に陥った事実。放射能のレベルは下がっても半永久に続き、自然界や人体へ影響を与え続け、地域が喪失していつている。そして、子どもたちは地域崩壊や家族離散の悲しさを、重い生活現実として抱え込んでしまった。

原発と原発事故を学ぶには、この生活現実を捨象してはならない。何事もなければ、日々「普通」に暮らしていた人々や子どもたち。それが叶わない理不尽な悔しさや苦しきを見落としてしまう。<sup>(6)</sup>

白木は、これに続けて、原発事故による避難の渦中、3・11からほぼ一年経った頃に「K子」が書いた作文を示す。

今、複雑な気持ちです

5年 K子

私は、震災のあった時、こんなことになるとは思っていませんでした。

原発事故でのひなん生活。弟や私は変わってしまいました。今はたのしいけれど、やっぱり不安です。ひなんして友達がほとんどいなくなって、友達関係も変わりました。とても仲の良かった友達は新潟に行って、今手紙のやりとりをしています。さみしいです。

私は原発をうらんでいます。でも、こうなってしまったのは仕方ありません。新しい友達が増えたのに、仲の良かった友達がいなくなりました。ひいおばあちゃんがひなん中に亡くなりました。くやしいです。<sup>(7)</sup>

決して「見落とし」てはならない理不尽な悔しさや苦しき。生活現実を「捨象」した学び（あるいは「捨象」することを強いる教育）ではなく、子どもたちが現実（真実）を鋭く見つめることを支える教育実践への念願を、白木はこの頃に明瞭に持っていた<sup>(8)</sup>。

### (3) 「生き方の根幹にかかわる問題」、子どもに手渡す「社会」と「希望」

そして白木は、同稿の最後部で、「生き方の根幹にかかわる問題」にこう論及している。

浜通り地方からの避難者と、受け入れた地域住民との間で、少なくない軋轢が生まれている。この軋轢が感情的ないさかいにとどまるなら、それは原発問題の本質を見失い、新たな差別と分断を生み出すだろう。

原発事故が長引くにつれて避難生活も長くなってくると、これまで親身で同情的だった住民も、…(略)…「保証金がもらえるからええな」とやっかむようになる。そして、口にこそ出さないが、ことばの奥に、「原発を誘致して原発マネーの恩恵にあずかった人々が、いまさらそんなことを言っても……」という響きをもつようになる。しかし、ここには、高度経済成長に向かう時期に、農業と水産業の他なんら経済的基盤をもたず、国策に乗るかたちで原発を誘致するしかなかったことに対する地域の苦渋・苦悩が汲み取られていない。

一方避難者は、「国や東電にだまされた」「生活は出稼ぎに頼るしかない貧しい村だった。原発を誘致し、町を豊かにすることに何の問題があっただろう」と、「安全神話」を信じての町興しであったと口にする。しかし、この言い方だけでは、地域共同体の将来までも巨額な原発マネーに売ってしまったことを顧みないことになる。誘致から稼働までの国策が、地域を興すといったものではなく、「原子力の平和利用」を画策した国や一企業の利権を代弁したものであったことを、見逃してしまう。

帰るべき故郷をなくした今、原発で得た豊かさとはあまりにも引き合わない。

…(略)…これらは、膨大なエネルギー消費に依存してきた「豊かな生活」を顧み、この先どんな社会に生き、どう人間らしく生きていくのかという、私たちの生き方の根幹にかかわる問題でもある。

子どもたちにどんな社会を手渡していくのか、原発を学ぶ意味がここにもある。<sup>(9)</sup>

「この先どんな社会に生き、どう人間らしく生きていくのか」「子どもたちにどんな社会を手渡していくのか」を白木は自らに問い、また、(上記の「K子」の問いへの応答としても、)その問いを自らの実践の根幹に据えようとの心意が、ここから読み取れる。そしてこの問題は「私たちの生き方の根幹にかかわる問題である」と闡明する。ここには、「生き方」を問い、「生き方」に迫るところに一つの本質を持つ「生活綴方」という教育思想の真髓が認められる。

そしてこの、「この先どんな社会に生き、どう人間らしく生きていくのか」という「問い」は、後の2013年度の総合学習ワークシートの冒頭の言葉にほぼそのまま直接連なっていく。後述の通り、白木はこの問いを、のちに学びの中で子どもに直接投げかけていた<sup>(10)</sup>。

### (4) 「この先どんな社会に生き、どう生きていくのか」、地域から「選び取る」

2013年12月発行の共著書(教科研『講座』第5巻)に寄せた論考で白木はこう記していた。これは、石神第一小で5年生3学期の総合学習実践を行う以前の、1学期の中頃に書かれたものである。

「あの日からのおくりもの」。…(中略)…12歳の子どもにこう言わせることはあまりにも悲しく寂しいことではないか。今、そう自分自身に反問している。子どもたちが見つけ出した命や人とのつながりは、人が人として生きていくために大事にされなければならない。

しかし、放射能に汚染された地域は分断され、地域社会や家族のつながりはいまだに元にもどらないという厳然たる事実がある。この原発事故によって命までも脅かされ、ふるさとをなくすという特異な状況にあって、どうすれば前を向いて進んでいくのか。考えても行き場が見えない。この行き場がない閉塞感をこのまま子どもたちに背負わせてしまっているのだろうか。否、いいわけではない。

今、私たちがしなければならないことは、津波に流され、原発災害に苛まれるこの町にあって、この町に残ることを決意した父母や子どもたちとともに、帰れるふるさと、つながって生きる地域と暮らしをどう興していくのかをともに探り、学んでいくことではないか。これは、原発をはじめとした中央の下支えとしての教育ではない。地域が真に自立を目指し、地域で生きていく知恵や力を育む教育として、私たちが選び取っていかなければならないことではないか。そして、何よりも、この先どんな社会に生き、どう暮らし、どう生きていきたいのかを子どもの声に聴き、子どもとともに考え、学んでいくことを選び取っていかなければならない。これを地域に生き、地域を興す教育として、10年後、20年後の当事者であり、主権者である子どもたちに『希望』として手渡していかなければ、『大震災さえなければ。私はこの言葉を何度も口にしていた。けれど今は、その言葉を口にしない。大震災からおくりものをもらったような気がするから』という問いに答えたことにはならない。<sup>(11)</sup>

「中央の下支えとしての教育」を拒み「地域で

生きていく知恵や力を育む教育」への強い宣明がある。同論考で白木はこの文章の小見出しに、「行き場がないからこそ、この先を私たちは選び取っていく」と書いている。

しかし、先行きが見えない中で、では子どもたちに未来や希望を手渡してゆくにはどうすればいいのか、白木は2011・12年度の教務主任の頃からそれをずっと悩んでいたという。

先が見えない中だったからこそ、自分たちの手で将来を選び取るということができればいいのではないかと、そう考えた。それが、外（地域）に目を向けさせることであったし、原発を社会科学的にとらえることだと言ってきたことだった。しかしそれをどう実践として創っていいのかがよくわからない状態が続いていた。原発を社会科学的にとらえるといったときに、あまりに大きな問題でもあるし、小学生でどこまで行けるのかということもあった。例えば村山士郎氏<sup>(12)</sup>や東北作文の会の仲間からも、福島で地域を原発に売らないと反対してきた人たちに学ぶこと、福島の子が将来廃炉に立ち会ったとき再び原発を選ばない子どもに育てることなど、アドバイスをしてもらってきた。しかし原発のことをやろうと思ってもなかなか出来ず、ウロウロしていた。

教材化するだけの力量と余裕がなかったのだと思う。外部からの批難、価値判断の分かれることには「ふれるな」という教育委員会などからの圧力は、さほどに感じていなかったし、恐いとも思っていなかった。教材化できなかった私自身の不勉強、力不足です。<sup>(13)</sup>

### 3. 2013・14年度の学級文詩集

#### (1) 2013～14年度の実践の展開・概要

白木は、2013年4月に市内の石神第一小学校に異動、5年生の担任となった。4年ぶりの学級担任であったという。5年を受け持つと、生活綴方・学級文集実践を当初より行い、3学期には総合学習を実施する。持ち上がりの6年でも引き続き学級文集実践を重ね、2学期に構成劇を演じる学習発表会、そして3学期の「親子の手紙」の実践へと続く。

#### (2) 「学級文詩集」実践の展開

【資料1】は、2013・14年度の白木学級文詩集（一枚文集）の構成・内容の柱等である。ここから

学級文詩集実践の全体像、諸側面の一端が知れる。学校生活や家族のこと、「あの日」とその後、転校先での出来事を振り返ったり、石神第一小に避難先から帰ってきてからのこと、友だち同士のかかわりとつながり、父母等の仕事のこと等を記した作品が載せられてある<sup>(14)</sup>。そして学級活動や教科等での学びの受け止め方も日記や詩として表現されている。主題・構成を意識した作品もあり、多角的な作文指導の連続した積み重ねが見える。

そしてこの学級文詩集は、父母や家庭の方を意識してつくり、家庭で父母らにも読んでもらう学級通信の性格も持たせてある。それは、表紙の白木の添書き等からもわかる。

白木は5年生の学級文詩集の第1号の冒頭、序文にこう記している。

…(略)…この石神第一小学校でも作文(書くこと)を通して様々なことを学び合いたいと思います。

書くということは、身近な自然や社会、人間に目と心を注ぎ、物事のとりえ方や自分の生き方をしっかりさせることです。…(略)…

初めの頃は、日々の日記(長くても短くても)を書きながら物事のとりえ方や目のつけどころを学んでいきます。そして、みんなで読み合いながらひとりのみつけた良いところや、心の働かせ方のすばらしさをみんなで分かち合っていきたいと思います。そのためには、なんでもいいあえる自由なふんいきのなか、一人一人の良さを生かしながら共に伸びようとする、一人の喜びや悲しみをみんなのものにできる学級にしていかなくはなりません。このことは、私一人の力ではとうていできません。みなさん一人一人の力を借りながら共に考え、共に学び、共に歩いていって始めてできることです。どうぞよろしくお願いします。

さらに、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんたちともこの学級文詩集「明日に向かって」を通して、いろいろなことを語り合い、これからの子育てのことや教育のことを共に学び合っていきたいと思います。どうぞ、ご意見をお寄せください。

なぜ「明日に向かって」なのか。いろいろ考えました。何がふさわしい名前かと。地震と津波、原発事故によって、これまでの生活は激変してしまいました。この先を展望するにも固い現実が目の前にあります。家族離散、友だちとの離別など、子どもたちも様々な困難を抱えて生活しています。それでも、子どもたちは「明日に向かって」気丈に生きていま



## 【資料1】白木学級文・詩集『明日に向かって』『風は野をわたる』各号の構成、主題の一覧

2013年度・5年白木学級 文・詩集『明日に向かって』No.1～25	2014年度・6年白木学級 文・詩集『風は野をわたる』No.1～23
<p>No.1 学級文・詩集「明日に向かって」発刊に寄せて （＊友だちとの再会 楽しみだった）</p> <p>2 五年生になったね、どうだい、格別ですか？先生でよかったかい？ （＊友だちとの再会）</p> <p>3 へとへとだったよ、おにごっこ トホホホ……</p> <p>4 今、伸びるとき！ このチャンスを逃さずに （＊授業参観）</p> <p>5 感動を短い言葉で言い切る（詩） （＊母の日のこと、運動会でのこと、友だちのこと、家のこと、他）</p> <p>6 場面が目につかぶように描写する（詩） （＊「描写するとは？見聞きしたことや心に感じたことを、見たままに、したままに、感じたままに書き表すこと。「悲しい」「楽しい」「嬉しい」と書いてもその時々感情は伝わりませんね。」）</p> <p>7 家のことが分かる子であってほしい（詩）</p> <p>8 楽しい思い出泊活動 そして、父の日</p> <p>9 暑中お見舞い申し上げます</p> <p>10 感動を短い言葉で 「敬老の日」を書いたよ（詩）</p> <p>11 ありのままに書くとは？ （＊「見聞きしたことを、時間や事件の移り変わりの順序で、心が動いたまま、感じたまま、考えたままに書くことだよ。それには、何よりも日常生活の一つ一つの場面を感動的にとらえる目と心を育てていくことだよ。」） （＊ほのかさんの作品「画伯のサイン入り本を…」）</p> <p>12 ピーマン事件！？ （＊「楽しかった」「がんばった」と簡単にまとめるのでは「中身がない」。作品に学ぼう。）</p> <p>13 ピーマン事件から前進！？ 友だち、家族を見つめ、関わりを深めよう</p> <p>14 音楽祭！子どもたち頑張りました （＊作品例）</p> <p>15 一番に何を書くのか、書きたいことをはっきりさせて その場面だけをずばっと書く！（＊音楽祭）</p> <p>16 感動を短いことばで（詩） （＊音楽祭のこと。）</p> <p>17 いよいよ学習発表会！親子で構成詩を群読 そして合唱・合奏を （＊構成詩、台詞表）</p> <p>18 組み立てて書く（構成） （＊「言いたいことを、言い切るために（主題）。その元になった場面を切り取り、組み立てて書く。ほのかさんは何を言いたかったのだろう。それを言い切るために場面をどう組み立てて書いたのだろう。」） （＊ほのかさんの作品「ソロが吹けた」）</p> <p>19 言い切るために 場面を切り取って書く（主題） （＊里佳さんの作品「がんばった音楽祭」）</p> <p>20 あけまして おめでとうございます！ 元気で楽しい冬休みですか？（詩）</p> <p>21 新年の抱負、目標 お兄ちゃんの成人式 （＊冬休みの思い出、抱負）</p> <p>22 うれしかった！ 「ありがとう」</p> <p>23 家族に目が届くようになったね！</p> <p>24 太陽君、つらかったね でも行夫君と出会いよかったね！ （＊「避難したころのことを思い出した」太陽君の作文）</p> <p>25 「あの日」から3年経って</p>	<p>No.1 百年桜の木の下で</p> <p>2 日々のくらしを見つめ、人が生きる真実を汲み取る 鋭い目と心を育てよう！</p> <p>3 浩二君、お帰りなさい！みんなと仲良くやっつこうネ 家族・母親を見つめる</p> <p>4 六年生としての責任を果たせた運動会、力一杯頑張った陸上大会 （＊ほか、「父・祖父・働くということ」）</p> <p>5 いのちを慈しみ、平和に生きることを考え合おう （＊道徳「白旗の少女」と「東京大空襲」を学んで、授業の感想、沖縄慰霊祭の詩、谷川俊太郎「生きる」）</p> <p>6 子どもたちが書いてくれた夢 震災・原発事故前、後で そして、今夢をこう考えている こんな夢を持っている</p> <p>7 「あの日からのおくりもの」 君たちはどう読むのだろう （＊作品の引用と、感想）</p> <p>8 マラソン大会 がんばったね！悔しかったね</p> <p>9 祖父母から聞いた戦争の話 （＊「歴史で学んだ15年にわたる長く苦しい戦争」）</p> <p>10 やりきったね！学習発表会 先生は涙がでそうだったよ。</p> <p>11 とても考えさせられた劇でした （＊父母の感想）</p> <p>12 問題解決は子ども達世代に 「険しい道のりを乗り越えて行くための重要な経験値にして！」 （＊山野さん（お母さん）の感想・文章から）</p> <p>13 語り始めることから 「6年生になった子どもたちです。あの時の親としての思いや願いを共有していってください」（＊子どもたちの劇の感想）</p> <p>14 おじいちゃん、おばあちゃんから戦争を語り継ぐ （＊「歴史で戦争、東京大空襲、広島、長崎の原爆等を学んできました。あの震災と原発事故で家族と離れ、避難・転校した体験を持つ子どもたちです。だからこそ、子どもたちには、「平和の尊さや生命の愛おしさ」を語れる子に）」 （＊過去に受け取った子どもの作品を手がかりに。）</p> <p>15 祖父母から聞いた戦争の話、改めて綴った！ （＊「戦争の実相（話）を肌身で感じたままに」）</p> <p>16 香織さん、奈津美さん、お帰りなさい！よろしくネ</p> <p>17 でも、キャラを変える勇気がない これからもずっと空気を読んでいくのかなあ</p> <p>18 小学校最後の授業参観 「父母からの手紙」への返事を手渡して</p> <p>19 お母さんに初めて伝えた私の気持ち 「今まで言えなかったこと、今だから言えること」 （＊授業参観のこと）</p> <p>20 感謝の気持ちを伝えることができた 受け止めてもらえた！ （＊授業参観のこと）</p> <p>21 あれから4年… 「周りの人を大切にしたい」</p> <p>22 「みんなの支えがあったからこそ、つらかったことを少しずつ乗り越えられたのかな」</p> <p>23 感謝の気持ちでいっぱい！ 六年生を送る会、バイキング給食 「ありがとうございました」</p>

（各学年文詩集及び合本冊子目次から引用者作成。＊は各号の表紙記述の一部、内容骨子等を抜粋転記したもの。）

す。それは、私たちの「希望」そのものです。

私たちは、この子どもたちを後押しして行かなければならないと思い名前をつけました。<sup>(15)</sup>

学級の当初、子らと父母らに、「物事のとらえ方や自分の生き方をしっかりさせる」生活綴方の意義、読み合い共有する意味、文集名が「希望」への意を含む旨を述べている。また例えば、のちの、6年生卒業目前の「父母・家族からの手紙」<sup>(16)</sup>の実践を想起したとき、この当初からの父母等への働きかけの内実は、頗る意味深い。

#### 4. 2013年度(5年生)の実践

##### (1) 実践への思念と経緯、実際

白木は、5年3学期の総合学習を始めてすぐのおそらく1～2月頃、「福島は今と復興、復興後の教育を考える」という論考でこう書いている。

じいちゃん、元気でいるかな  
5年 I. S  
「もしもし、今週泊まりに行っている。」  
十二月のある木曜日  
じいちゃんが心配で電話した。  
原発事故でひなんしてから  
じいちゃんとは別々に暮らしている。  
「いいよ」  
じいちゃんはうれしそうに答えた。  
みんなで一緒に暮らしていたころ  
じいちゃんをよく  
大好きなにらたま汁を作ってくれたな。  
「ほらかぜひかないように  
手洗いうがいをしなよ。」  
とよくいっていたな。  
勉強の分からない所を教えてもらったな。  
早くじいちゃんに会いたいな。

… (略) …

子どもたちは原発災害による放射線の怖さを知っている。原発被害による家族離散などの悲しみを感じている。しかし、親も子どもも原発問題に対して口をつぐみ多くを語らない。何故だろうか。原発を誘致し稼働させてきた責任者の自己批判に至ってはなおさらのこと、耳にしたことはない。そして、私たち教師の間にもこの問題に踏み込まずにいる。価値判断が定まらないことには触れてはならないとする暗黙で強制的なしばりを恐れているのだろうか。

… (略) …

〔大熊町武内教育長の責任転嫁論<sup>(17)</sup>や、石原慎太郎都知事为天罰論のような〕これら、責任を転嫁した論や天罰論とする「タブー」をくぐり抜けなければ、子どもたちには本質的な問題は見えてこないし、そこから引き起こされた矛盾や悲しみ、苦悩を本当には語らないのだと思う。そして、ここをくぐり抜けるためには、福島原発が地域住民に犠牲を押しつける形で発展してきたという事実を、「学び」を通して学んでいくことだと思う。子どもたちには、上記作品のような日常の一こまを、実感を通して捉えさせていくとともに、これらの苦悩や悲しみ、いかりはどこからくるのか、子どもの率直な問いから出発し、共に学んでいくことだと思う。

そして、今、私は子どもたちと地域の現実、歴史を学ぶことから始めている。この地域に住み、地域をどう興していくのか、どんな地域でどう人間らしく生きていきたいのか、子どもの率直な願いや問いに基づいた学習を組み立てていきたいと考えている。

3年目の3・11が目の前に迫っている。<sup>(18)</sup>

現在進行形で総合学習を展開しているさ中の、白木の改めての強く明確な念願が窺い知れる。

白木は、2015年9月の連載実践記録の中で、この2013年度の実践をふりかえって、当時の思いを、こう記している。

これまでの価値観が大きく変わる出来事があの震災・原発事故だった。噴き出した諸矛盾、諸悪。やっと見つけ出した真実。だからこそ、子どもたちには物事の本質をきちんとつかめる子にしたい。それには、実際の物事や人の生き方に直面したとき、これらを生きたまじりと感じ取る力を磨き、その中に見え隠れする人が人らしく生きることの真実や、それを拒む諸悪を鋭く追究する目と心を育てることではないか。広く人間とは何なのだろう、生きるとはどういうことだろうかと考えていける子に育てることではないか。けれど、先の見通しが持てない迷っているばかりの実践だった。<sup>(19)</sup>

そして同論考の中、「今を懸命に生きるとは？」という見出しの箇所でもこう述べている。

10月には地区音楽祭があり、11月にはマラソン大会や学習発表会などの行事があった。これら一つ一つの行事に懸命に取り組んでいった。けれど、放射線により閉じ込められてしまった環境、先を見通せないことによる苛立ちや焦りがあった。何かがすり替えられようとしている。オリンピック熱に絡めとろうとすることに似て。谷川俊太郎の詩の一節。「かくされた悪を注意深くこばみ」、今を懸命に生きるこの、この先をどう考えていけばいいのだろうか。

3学期。子どもたちとは、改めて地域の現実から

学んでいきたいと思った。家族や友だちはなぜこんなくらしを強いられたのか。この地域で人々はどう生きているのか。生きていこうとしているのかを。そして、子どもたちと『原子力発電事故における南相馬市の状況について H23南相馬市』を学習していった。<sup>(20)</sup>

この頃白木は、前記の「選び取る」ということに関して、どう考え、何をしてきたか。そしてどのような経緯・契機から総合学習の展開への着想に至ったのか。

5年生の頃は、毎日の生活を懸命に生きるということ、とにかく子どもたちとやってきた。例えば音楽祭で自分が指揮して、自分が選曲して、子どもたちと一緒にやってきた。この頃、坂元忠芳氏が子どもの作文を読んでこう言ってくれた。抽象を借りることなく、生活実感の中にある抽象まで高めよ、と。生活実感を貫く抽象性。つまり「鋭い生活実感を通してとらえたことば（表現）は、抽象そのものである」という意味。生活綴方で言うリアリズムだが、子どもが生活実感としてとらえたことを抽象に高める、換言すれば、「実感によることば・表現を抽象にまで磨き高める」ということ。ものの見方や考え方、見つめ方を鍛えていくことが、原発や社会の問題、人間の生き方を見つめてゆくことになる。だから5年生の時は、実感を抽象にまで高めることと、「今を懸命に生きる」という、その一点張りで、ずっと勉強をしてきた。それが12月頃まで。

では、なぜ、12月以降～翌年3月、南相馬市のあの資料（「原子力発電所事故における南相馬市の状況について」）に行き着いたのか。一つは、私自身、「ふたば未来学園」の構想について学んだことが、大きなきっかけだったと思う。そこには、「原子力発電を扱うことをタブー視しない」とうたっているのに、実際は「ふるさと創造学」や調べ学習としての資料や本を使った「原子力の仕組み」のような学習が志向されていて、生の生活を捨象する教育構想に、落胆していたのだと思う。ならば南相馬市の実際の姿を学ばせたいとして、行き着いたのが「原子力発電～」。もう一つは、「異化」という考え方。荒れが「新しい荒れ」として呼ばれていた頃、子どもたちを別の世界につれていき、別の世界を見ることによって、今の自分がしている〈いじめ〉がいかに愚かなことか、人として小さなことかを考えさせるような実践があった。この当時、坂元忠芳先生はワロンに学び「異化」ということを提唱していたし、村山士郎さんもよく引用して、綴方の新たな視点として提起していた。路上で暮らす子どもたち、水汲みで往復4時間もかかる仕事をしている子ども、などの、生活を学ぶことによって、真に生きるとはどんなことかと考えさせていった実践である。おそらく、この考え方が私の頭の中であって、

子どもたちを、別の世界にと、それが「原子力発電～」になったと思う。こうして、直接には、ふたば学園に感じた違和感と、「異化」という考えが、私を、「目を外に」向かわせたのだと思う。<sup>(21)</sup>

## (2) ワークシートの実践、学習の内容

【資料2】は、3学期に実施した総合学習で実際に使用したワークシートである。この「余白」等に、子どもたちが、学校の授業あるいは家庭で、資料から読み取ったことや、父母等家族から聞いた話、自分の思いを書き込むというかたちで進めていった。そこには、家庭で直接父母等に記入をしてもらった場合(部分)もあった。それらを子どもたちが持ち寄り、グループで友達やいろいろな人のものを読みあって、学びなおしたという<sup>(22)</sup>。

ワークシートの冒頭、学習テーマに据えている「この先、どんな社会（地域）に住み、どのように生きていきたいか」は、先述の通り、2012年の時点で白木が論考で記していた問いのことばである。ワークシートの全体では、南相馬市の避難などの状況、「働く」状況、医療や介護、農業の状況を、調査・学習の内容に据えている。

【資料3】の文章は、総合学習の一環で、子どもたちが家庭で父母等を書いてもらった文を、白木がのちにまとめた(冊子の一冊一冊から拾って記録した)ものである。この、子どもたちが調べた内容・事項(家庭で父母等が記述した文章を含めて)から、子どもたちが親等からどのような話を聞き、どのようなことを学び考えたか、その深刻な事実が窺い知れる。

## (3) 子どもたちが学び考えたこと(抄)

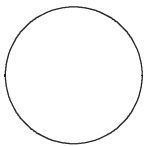
学習後の子どもたちの感想は、次のようなものであった。その一部のみを引用する。

加奈

この勉強をして元々の人口よりもすごい人数の人がひなんして、この南相馬市から離れていくのがいやだ。私は生まれ育った南相馬市が好きだからみんなもどってきて、この南相馬市が元気になり、にぎやかで楽しくなるような町にしたい。そして、震災前よりも、みんなが「安心・安全」に住めるような町にしたい。

どうしてこの福島県、この南相馬市に原発という

## 【資料2】白木学級（2013年度、5年生）の総合学習ワークシート（6枚分）

<b>総合学習</b>	みんなで考えていこう								
<p>この先「どんな社会（地域）に住み、 どのように生きていきたいか」</p> <p><input type="checkbox"/> 今どんなことを思っているのか、考えているのかを書いてみよう。カットも入れてみよう。</p> <div style="border: 1px solid black; height: 40px; width: 100%; margin-top: 10px;"></div>									
- 1 -									
<p>1. これまでの経過を振り返ってみましょう。</p> <p><input type="checkbox"/> 資料「1 これまでの経過」を読んで、あの日自分は、家族はどこで、どんな気持ちで、どうしていたのだろう。余白に思い起こしてみよう。</p> <p style="text-align: center;">（余白）</p>									
- 2 -									
<p>2. 南相馬市の避難などの状況を見ていきましょう。</p> <div style="text-align: right; margin-top: 20px;">  <table style="margin-left: 20px;"> <tr><td>◆南相馬市内居住者</td><td>65%</td></tr> <tr><td>◆市外避難者</td><td>22%</td></tr> <tr><td>◆転出者</td><td>9%</td></tr> <tr><td>◆?</td><td>4%</td></tr> </table> </div> <p><input type="checkbox"/> およそ31%の人がこの地域を離れました。みなさんやお家の人はこのことをどう考えているのでしょうか。家の人に聞いたり、自分のことを考えたりして書いてみましょう。</p> <div style="border-top: 1px dashed black; height: 20px; width: 100%; margin-top: 10px;"></div>		◆南相馬市内居住者	65%	◆市外避難者	22%	◆転出者	9%	◆?	4%
◆南相馬市内居住者	65%								
◆市外避難者	22%								
◆転出者	9%								
◆?	4%								
- 3 -									
<p>3. 生活していくためには働かなくてはなりません。南相馬市の『働く』状況を見てみましょう。</p> <p><input type="checkbox"/> 今回、みなさんのお家ではどんなことがありましたか？聞いてみましょう。</p> <div style="border-top: 1px dashed black; height: 20px; width: 100%; margin-top: 10px;"></div>									
- 4 -									
<p>4. 安心して暮らすためには、『医療や介護』が大切です。状況を見てみましょう。</p> <p><input type="checkbox"/> この学級には医療や介護関係で働くお父さん、お母さんが多くいます。今、どんなことをお考えなのか、聞いてみましょう。どうしてこの地に残って仕事にあたっているのかも聞きたいところです。</p> <div style="border-top: 1px dashed black; height: 20px; width: 100%; margin-top: 10px;"></div>									
- 5 -									
<p>5. 石神地区は農山村です。南相馬市の農業はどうなるのでしょうか？</p> <p><input type="checkbox"/> 「鹿島区と原町区」と「小高区」を比べてみましょう。また、「小高区」のH23年とH24年を比べてどんなことがいえますか。</p> <p style="text-align: center;">（余白）</p> <p><input type="checkbox"/> おじいちゃんやおばあちゃんを中心になって農業を営んでいるお家も多いでしょう。上のことをお家の人やおじいちゃん、おばあちゃんに聞いてみましょう。</p> <div style="border-top: 1px dashed black; height: 20px; width: 100%; margin-top: 10px;"></div>									
- 6 -									

（＊白木次男氏の教育実践記録ノートから引用。）



## 【資料3】子どもたちが書き記し、調べた内容・事項、家庭で父母等が記述した文章

**みんなで考えていこう****この先「どんな社会（地域）に住み、どのように生きていきたいか」****○ 今どんなことを思っているか、考えているか**

- ・友だちと離ればなれになってさみしい
- ・外であまり遊べない
- ・みんなと一緒に生活できないか。早く除染してほしい。
- ・原発をなくしてほしい
- ・震災前は学校で放射能の話や地震の話などしなかったのに、震災後は授業やアンケートなどで震災のことを聞かれたりするから少しつらい。
- ・生活では震災前は祖父が作った野菜を母と採りに行って自分で食べたのに、今ではハウスで作った野菜も食べないし、「畑に近づくな」（あまり）と祖母に言われて少し悲しい。

**1. これまでの経過を振り返ってみよう。**

- ここは改めて作文を書いてみる

**2. 南相馬市の避難などの状況は？**

- ・避難するしないはその家で決めることだから何も言わない。（避難者に対して）
- ・放射能がこわい。除染していない。
- ・前より人数が少ないから早く戻ってきてほしい
- ・家庭の事情や個人個人の考えがあるので仕方ないと思う。

**3. 『働く』状況は？**

- ・学校が始まるまでは一緒に避難したが、学校が始まるとお父さんも原町に帰って仕事をしていた。会津では4～5回しかこれなかったけど、でも週末は私たちが原町に帰っていたのでおばあちゃんやお父さんに会うのが楽しみだった。
- ・働く場所、会社がない。
- ・放射能の影響で造園業だった仕事も職人も解雇し、新たに別の事業を再開し、復興関係の仕事をしています。（除染と港の復旧事業）
- ・自宅周辺は水田や畑が多く農業が盛んだったが、放射線の影響で作付けできない。南相馬市では除染を計画しているが仮置き場の問題があり進んでいない。父は福島からの避難先から一人でJAに戻され、仕事に復帰した。地元は当時混乱しており、毎日会議と一般問い合わせの対応に追われたそうです。

**4. 安心して暮らすには、「医療や介護」は？**

- ・震災時南相馬市立総合病院に勤務。原発事故により多くのコメディカル（医療従事者）が避難を余儀なくされた。子育て世代が避難していく中、老老介護やコメディカル不足によりケアの徹底不足が問題視されている。私は避難により一時退職したが病院側からのスタッフ不足の事情を聞き復帰しました。震災時の病院のことが頭によぎったからです。

**5. 「農業」は？**

- ・水田の作付けは今年からする方向で進んでいる。収穫しても消費者は当地区の米は食料として使用しない現状である。この現状を市や県の行政機関の指導がおかしいと思います（ママ）。生活圏の除染はまだ20～30%位かも。農地の除染はまだされていない中、米の作付けはおかしいと思われます。
- ・大原地区は放射能レベルが高く、5000～25000ベクレルという放射能があります。震災前のレベルになるまでは自然の力では800年ぐらいかかります。それで、この地区は農業をあきらめました。

（＊白木次男氏の教育実践記録ノートから引用。）

ものがあるのだろう。もしなかったら放射能もそこから出ないと思うからなくていいと思う。

佳織

私は原発事故が二度と発生しないように原発をとりこわしたほうがいいと思います。あと、県外に避難した人が地元に戻ってくるように早く除染してほしいです。大人になるまでには人口が震災前のようにもどってほしいです。近い未来は大熊町や浪江町の放射能が少なくなしてほしい。

奈緒

原発がなくなるといい。たくさんの人がもどってきたらいいと、たくさんの人がいっているけど、人がもどってきてても前のように仕事はじゅんちょうには進まないと思う。震災後、お金が入ってくる人もいるし、もらえない人もいる。だけど、家を建てるには喜ぶ人もいるが、お金が入ったからといって何が変わるのだろう。お金が入ったからって嬉しい人はたくさんいる。けれど、震災で亡くなってしまった人はお金でもどってこない。

大きくなったらどうしよう。どこも震災でやられてしまっている。私のいる所はどこがいいのだろう。今は全とお父さんとお母さんやおじいちゃんやおばあちゃんがいろいろと教えてくれる。例えば生活費。でも、私が大きくなって私だけで何も出来ないのかな。だって私達は震災の時、助けてもらって生きていたから。生きられなくて死んでしまう人もたくさんいるんだよね。めぐんでもらってたから、生きているから、大きくなってからのことはまだ分からない。

幸子

私は病院に入院してもすぐに退院させられる事や介護しせつに入れないということを考えると、避難した方がいいのかもしれない。でも、他の学校に行ってみると別々になるのはいやだからここに残る。

大人になったら南相馬市に若い人が少ないから、南相馬市の仕事につきたい。でも、結婚して赤ちゃんが生まれたらたぶん、県外に避難すると思う。私は早く除染が終わり、みんなが戻ってくる、前の生活に戻りたい。<sup>(23)</sup>

ここに引いた奈緒さんの感想(作品)について、白木は、のちに書いた論考でこう記している。

この作品は、2014年2月、5年生の終わり頃のもので。原発事故の現状を学んだ後で、「この先どんな地域に住み、どう生きていきたいか」という問いに対して書いてもらったものです。奈緒さんは、原発被災がもたらした現状と困難をつかみ取りながらも、今後の生活について、「助けてもらって生きていたから」「めぐんでもらってたから」「大きくなっ

てからのことはまだ分からない」と将来を不安視しています。この奈緒さんの将来への不安、自信の持てなさをどうとらえ、どう応えていけばいいのでしょうか。<sup>(24)</sup>

## 5. 2014年度(6年生)の実践

### (1) 実践への意図、思念

雑誌『作文と教育』の連載実践記録で、白木は、持ち上がった6年学級での実践への意図をこう述べている。

「教えるとは希望を語ること 学ぶことは真実を胸に刻むこと」。フランスの詩人アラゴンの有名な名句である。先月号の「感想を引用した…引用者註」奈緒さんの将来への不安、自信の持てなさにどう答えたらいいのだろう。私は何を希望として伝えられるのだろう。子どもたちは、何を真実として胸に刻むのだろう。

2014年4月。6年生になった子どもたちとは、『原子力発電事故における南相馬市の状況について』(H23南相馬市)で学んだことを、地域で起きている現実と対照させ、よりリアルにとらえることをさせていった。畑を耕すことが生き甲斐だったのにそれができないことを嘆き、自分らが食べても孫には食べさせられない不満を語る祖父母。この地の農業を復興するため県産の肉牛を青森に売り込みに行く父親。医療スタッフが手薄になってしまった病院が気がかりで、また働き始めた母親や仮設住宅に暮らす人々の力になりたいと話す母親。これら身近な家族の息遣いをリアルにとらえさせ、自分はどうとらえ、どう希望を持って生きていきたいかを考えさせていった。<sup>(25)</sup>

学級・教室で「学んだこと」は、「地域で起きている現実」とは、まだ離れている。前者を後者と「対照させ、よりリアルにとらえることをさせてい」くことを、白木は考えていた。特に6年生では、「身近な家族の息遣いをリアルにとらえさせ」ること、暮らしを書き綴ることを励ますことを、生活綴方・学級文詩集での実践を通して重ねていった。

白木は、5年3学期の総合学習をどう振り返り、6年生でどう展開しようとしたか。

生活綴方とは、目の前の祖父母・父母のリアルな姿から、自分の考えを鍛えていくもの。資料だけ読んで、さっさと、分かったような気になっても、それは生活や生きることの本質をとらえたことにはならない。実感を通して分かるということは、祖父母

や父母の姿を自分に引き寄せ、感じとることであり、そこに生じた（そこで受けとった）感動や感情を人が生きることの真実にまで高めていくことですね。

5年生の終わりの総合学習では、まだ足りないのかなと思っていた。これで学んだといっても、あくまでも資料を通して。祖父母や父母に資料を元にインタビューしているところもあるけれど、まだ受け身的だし、傍観的。自分に引き寄せて考えていない弱さがある。

例えば、幸子ちゃんは仮設住宅を見回る仕事をするお母さんの、仕事の大変さや苦勞、そして働くことの喜びや誇りを、お母さんの働く姿を書き綴ることによって知っていった。この現実の姿を、自分の目で見て感じるという過程を潜ることによって幸子さんは、地元に残り、お母さんのような仕事に就くのもいいかな？と価値判断していく。でも幸子さんはまだ迷っているのですが…。子どもたちには、この幸子さんのような過程を潜って、自らで価値判断し、意思を決定するようなことをさせたかった。

そして、あの頃は、戦争や平和、いのちのことについて、子どもたちと絶えず語り合ってきた。<sup>(26)</sup>

白木は、上記の長編実践記録の続きの箇所で、こう記している。

一方で、平和の尊さやいのちを慈しむことの大切さを、そして、これらを妨げるものとして戦争・原爆・原発を学んできた。沖縄慰霊の日に発表された「へいわってすてきだね」（小1 安里有生・あさとゆうき）や「変えてゆく」（高3 名嘉司央里・なかしおり）を学ぶこともあった。平和とはごく身近にあり、家族とともに安心して暮らせることだと。「生きる」谷川俊太郎からも、生きることの苦しみや歎び、そして、悪を注意深く拒むことを学んでいった。逃げまどい家族と離れ、避難・転校した体験を持つからこそ、原発に対峙したとき、平和の尊さやいのちを、大切さを、語れる子にしたいと。<sup>(27)</sup>

これらの実践の実際、その内実の大筋は、前掲の学級文詩集の各号の主題・内容からも、具体的に確かめることができる。

他方、例えばこの幸子さんには、5年生で一度学んだことを、6年生で「生活に返して」ゆく姿があると、白木は述べる。

これでまとめた、というのは、データをもとにして、聞くわけですね。で、そうやって聞いて、こう書いたりして、また、ばあちゃんやじいちゃんに話してもらって、わかる。その、わかったことを、もう一回、生活に返してやる、というのが、6年生になったの作文だったと思うのです。6年生になっ

てから、幸子ちゃんは、ここで勉強したことが、あの仮設住宅のおばあちゃんの話になったりしていくんだと思うんですね。そうやって、もう一回、学んだことを生活に返して行って、生活の中の現実を書くことによって、あらためてそのことが実感的にわかる、そのプロセスは大事にしたいですね。<sup>(28)</sup>

総合学習で、データなど教室で一度学んだことを、次には「生活に返して」ゆく。父母や家族の生活現実を、自らが見たまま聞いたまをありのままに、自分のことばで書き綴ることによって、あらためてそのことが「実感的にわかる」。こうして、「学んだことを、暮らしの中でリアルにとらえる」こと、振り返る機会を保障することを、実際に白木が行っていたことは、学級文詩集の内実から知れる。

## (2)『風は野をわたる』の作文から

では次に、子どもの作文の実際について、ここでは、5年生3学期の総合学習をうけて、6年生になってから、生活現実を書き綴ることへと展開していった一つの典型として、幸子さんの一連の作文（あるいは詩）に着目し焦点を当て、実践の実際の姿、内実の一端を確かめてみたい。これらの幸子さんの作品は日記として書かれたものもあるが、いずれも学級文詩集のなかで取り上げられ、学級で読み合い、父母・家族にも読まれていった。

まず、「風は野をわたる」No.2（5月8日）である。白木はその表紙に、題を「日々のくらし [を] 見つけ、人が生きる真実を汲み取る鋭い目と心を育てよう」と付けている。そして表紙の挿入文には、こう記している。

家庭訪問、お忙しい中時間をとっていただきましてありがとうございました。みなさんから教えていただいた「お子さんの良さ、がんばり」をさらに伸ばしていけるようにしていきたいと思います。

家のことが分かる子、お父さんやお母さんの仕事分かり、自分のこととして受けとめ考えていける子にさせたいと思い、先々日「お母さんの仕事」取材させました。まだまだ入り口に立ったばかりですが、日々のお母さんの様子や会話から、働くことの苦勞や喜びなどを学ばせ、「自分はどうか」を考えさせたいと思います。

このNo.2には、数人の子の作品が載せられてい

るが、その中に、幸子さんの作文がある。次に白木のコメントもあわせて、引用する。

孤独死

幸子

「ただいまー。」  
お母さんが帰ってきた。  
「おかえりー。」  
と私が言ったすぐ後にお母さんが、  
「あのねー、髪の毛がすごいおばあちゃんいるでしょ。」  
と言った。  
「えっ。」  
と言うと、またお母さんが、  
「あの、ほらよく百円ショップで見かけるおばあちゃん」  
と言った。(ああ、あのリーゼントみたいな形の髪の毛に、いつもスカーフをしているおばあちゃんか。あのおばあちゃん何かしたの。)  
と思った。するとお母さんが、  
「死んじゃったよ。」  
と言った。暗い表情だった。  
「ええー！」  
と私は大きな声を出しておどろいた。そのおばあちゃんは牛越仮設住宅に住んでいて、ジャストというスーパーと一緒にやっている百円ショップでよく見かけたことがある。

○このおばあちゃんのことを地域の人はどのようにとらえていたのだろう。

○復興というけれど、原発災害は未だに収束していないだね。「関連死」が直接死を上回っていますね。

○小高に住んでいるときには、近所の方々とのつながりがあったはずなのに、ポツンと断ち切られてしまったんだね。

お母さんの話によると、そのおばあちゃんは[小]高に住んでいたが、震災と原発事故の影響で牛越仮設住宅にひなんしてきた。一人暮らしで持病があったらしい。「そういう人がいると心配だね。」とお母さんが言った。  
「どうして心配なの。」  
と聞くと、お母さんは、  
「具合が悪くなった時に面どうを見てくれる人がいないから、具合が悪くなってもご飯は自分で作らなきゃならないし、医者に行くのにも具合が悪すぎたら一人ではいけない。そうなったらますますひどくなって、孤独死してしまうかもしれないから。」  
と言った。(お母さんは、他の仮設住宅を見回り安否確認をしたりコミュニケーションをとったりする仕事をしているから、別の仮設の人のことも気になり、しっかり考えているんだな) と思った。

こどく死してしまったおばあ

ちゃんは、何日も発見されなかった。お母さんは、  
「心きんこうそくじゃないかって話だよ。」  
と言った。もう少し早く発見されていたら助かっていたかもしれない。でも、そのおばあちゃんの部屋にはカギがかかっていて入れなかったらしい。何日か経っても仮設から出てこないの、見回りをする人と市役所の仮設住宅担当者とおまわりさんと部屋の合いかぎを持って部屋に入った。部屋を見るとそのおばあちゃんがたおれていた。

私はこどく死はつらく悲しいことだと思う。一人暮らしの人の支えになる人は、見回りをしている人や近所の人だと思うから、支え合っていかなければならないと思う。

□ 幸子さんは、「ある日、ある時」のお母さんの話から、人が支え合って生きることの大事さ、それができなかったこと[の]悲しさ、困難を切り取って書いてきました。日々のくらしを見つめ、そのなかから人が生きる真実を汲み取る鋭い目と心を育てていきたいと思います。<sup>(29)</sup>

白木が、幸子さんの作品を評価しながら、「人が生きる真実を汲み取る鋭い目と心を育て」ることを希求・念願していた実際の、そしてその旨を子どもと父母に伝えようとしていた事実が、この「評」の記述からわかる。

次に、No.3 (5月22日)では、表紙に「…(略)…母親を見つめて詩を書きました。家族の一人としてお母さんを思い、力になろうとする『自分』になってほしいと思います。ここに載った子どもたちの、母親を自分のこととしてとらえる姿に多くを学ばせたいと思います。」とあり、幾つかの作品が載る。

うれしそう

幸子

「ただいまー」  
お母さんがしごとから帰ってきた  
ガラガラ  
母は茶の間の戸を開けた  
「おかえりー」  
と私がふり向くと母は  
大きな花をかかえていた  
「何それ！」  
私が大きな声で言った  
「これね、仮設の人にもらったの」  
お母さんは笑顔で言った  
お母さんうれしいんだな  
五月三日はお母さんのたん生日だった

○それを幸子さんのお母さんがつなぎとめようとしてくださっているんだね。幸子さんは、このことの大切さに気づこうとしている。この先も、お母さんが働くことを見聞きして考えていってね。



母は仮設に住んでいる人の見回りを  
一緒にしている人に大きな花をもらった  
「ここにかざろー」  
母は茶の間に五つあるシクラメンのとなりに  
その花を置いて  
またにっこり笑った

□ 仮設に暮らす人たちに親身になって働くお母さん。日頃のそれが「感謝の気持ち」として返ってきた。お母さんの働くことの「誇り」です。

幸子

「畑を耕せず、ご先祖様に申し訳ない！」  
五年の時の授業で祖母が紙に書いてくれた文章  
私はなぜ「ご先祖様に申し訳ないのか」分からなかった  
「何でご先祖様に申し訳ないの」  
と聞くと  
「ご先祖様は田畑をうーんと苦勞して求めたから  
それを荒らしておくのは申し訳ないでしょう？」  
と私の目を見ながら言った  
祖母は、先祖の苦勞を考えているんだな

□ おばあちゃんの嘆きを切り取って書いたね。放射線の影響で働く喜びばかりか、田畑を守ること  
も難しくなってしまったね。除染がうまくいってほしいね。<sup>(30)</sup>

白木は、のちに書いた論考で、この作品「うれしそう」について、こう言及している。

この子たちは8年もすれば当事者になるとともに、主権者になります。このことを大人である私たちが自覚し、生きる主体としての子どもたちを後押ししていかなければなりません。

子どもたちとは、信頼できる大人として、子どもの内なることばを聴き取りたいと考え、日々のくらしの中で感じたこと、考えたことを実感のあることばで、ありのままに綴ることを大事にしました。子どもたちは人間の織りなす喜怒哀楽を書き綴り、読み合いながら、生きることや生きる真実を少しずつ手にしてきました。

また、子どもたちとは地域の現況を学び、書き綴ってきました。この地域は、就労、医療・介護などの問題を抱えています。何よりも放射線に対する心配が大きく、避難した多くの子どもたちが帰ってきません。なかでも、子育て世代の人たちが帰ってきません。

子どもたちは、働く場所がない、田畑を耕せないなど、父母や祖父母の苦悩を肌で感じ、息づかいまでもすくい取りながら、この地で生きることや将来のことを考えてきました。

この作品はその一コマです。幸子さんのお母さん

は仮設住宅見回りの仕事をしています。そのご苦勞をねぎらってか、仮設の人たちはお母さんの誕生日にプレゼントをしてくださったのです。

… (中略) …

幸子さんは、この詩や作文を書いた後、  
「母の仕事は心配や苦勞も多いけれど、母はこうやって、ここで人のためになれることをしている。誇りや生き甲斐を持ってやっている。ここで働くのもいいかも……。まだはっきりしたことは言えないが……。」

といった旨のことを話してくれました。幸子さんは、働く母親を見つめながら、将来を考えようとしています。

親も厳しい選択を迫られたあの日です。多くのことを失くしました。だからこそ思っていること。今だから伝えられること。伝えられないでいることを子どもたちと共有し合いながら、「希望」を紡いでいってほしいと思っています。<sup>(31)</sup>

続いて、No.4 (6月30日)には、「父・祖父・働くということ」という小見出しの下、数名の作品の中に、次の幸子さんの作品が載っている。

牛売れたかな

幸子

夜の二階はシーンとしていた  
父が農協の畜産課の仕事で  
青森県に行っている  
テレビも電気も消して  
母は先に寝ていた  
(明日帰ってきたら聞いてみよう)

次の日の夜遅く、帰ってきた父に

「牛売れた。」

と聞いた

「十二、三頭売れたよ。」

ああ、疲れた」

父は眠そうな顔をして言っているけど

笑顔で言っている

嬉しいんだな<sup>(32)</sup>

### (3) 書き綴らせることの意味

また、幸子さんは秋頃、こういった日記も書いていたという。

嬉しそうなお母さん

6年 幸子

九月二十五日、いつものようにお母さんがガラガラと、戸を開けて帰ってきた。

「お帰りー。」私がそう言うと、

「ただいま。」お母さんもそう言った。お母さんの名札のひものところに、花の何かがついていました。

「ねえ、何。その名札についているお花。」

私が尋ねると、

「ああ、これはね。仮設の人達と作ったの。お花のブローチだよ。」お母さんがブローチを見つめながら言った。

「今日、仕事に行ったら、仮設の人に「具合悪かったのか。」「顔みないから心配していたよ」とか、みんなに声をかけられちゃって、逆安否確認されちゃったよ。」と笑いながら言うお母さんに教えてもらった。お母さん、嬉しいんだと思った。

(中略)

「住民さんたちがね。お母さんが体調不良じゃないって分かったと、集会所で「一緒にブローチ作ろう」って言われて、仮設のおばあちゃんたちと一緒に新作のブローチを作ったの。」笑いながら話をすのお母さんは、とても楽しそうだった。<sup>(33)</sup>

白木は、2016年のある研究会の報告資料でこの日記の文を紹介し、こう述べている。

実母の入院と介護のため、9月の連休を休まざるを得なかった母親が、連休を挟んで長い間休んでいたことに対して、仮設にすんでいる方々から「逆安否確認された」、ということを書いている。

… (中略) …

仮設住宅で暮らす方々と苦楽を共にする母親の姿を、この地で起きている現実として自分に引き寄せ、そのなかで働く母親を誇らしく思う。そして、「この地域に残り、人のためになる仕事に就くのもいいかな」とも思う。でも、一方で「放射線の心配もあるし、結婚して子どもが生まれたらどうかな。自分にも自分の夢があるし。まだ分かりません。」とも。父母もまた「これまでの価値観が変わってしまった。幸子には今を懸命に生きていってほしい。それに、ここに止まるも、止まらないも幸子に任せたい」といっていた。子どもにとっての選択の自由と意思決定権も尊重されなければならない。幸子さんは、絵空事の夢や希望ではなく、目の前の現実を鋭く切り取り、リアルに書き綴りながら、自分の生き方を考えていっているのだ。<sup>(34)</sup>

この幸子さんが書き綴ってきた文、そしてその連続的な営みのなかに、白木は書き綴らせることの意味を見取り、認めている。

こうして、家族の生きる姿、地域の生活現実をリアルに書き綴ることを重ねてゆくことが、現実目を開き、地域の現実からものを考え、事実から学んでゆく力量を子どもが自ら備えることへとつながる。そしてそれを学級で読みあい学びあうことが互いを繋げ、その社会認識を実感的なもの

へと高め、「生き方」への向かい方を深めてゆくことができる。生活綴方教育実践という地道な営みの、一つの尊い事実と、その意義を、ここに確かめることができる。

#### (4) 構成劇の脚本から

秋の全校での学習発表会で、6年生は父母や家族、地域の方を前に構成劇「Dreams come true together」を演じた。上述の、幸子さんらが書き綴ってきた内容を、白木は、地域の生活現実の一つとして脚本に書き込んだ<sup>(35)</sup>。以下はその構成劇脚本の後半の一部である。

〈5場〉

(N):「この先、どんな社会に住み、どう生きていくのか」大人でも分からないのに、先生が出した宿題。大地震と原発事故。未だに半数近くの人が帰れないでいます。放射線に対する不安ばかりか、就労、介護、医療の問題も抱えている南相馬市。この状況の中で、私たちは「どうしていったらいいのだろう。」「どう夢や希望を紡いでいけばいいのだろう」

○里佳 ピアノ ♪タ、タタタン、タ、ターン♪

(N):11月の学習発表会が一ヵ月後に迫っています。

柱 2つの家族が、居間で南相馬市の現状や将来を話し合っている。

○幸子の家。幸子が祖母と二人会話をしている。  
幸子:おばあちゃん、今日宿題が出たの。えーっと、「原子力発電所事故における南相馬市の状況について」だって。この中のことで、家の人にインタビューしてきなさいって。いい?

祖母:どれどれ。

幸子:ここ、ここ。(「農業・農業者の状況」を指さして)ここに、この先農業をしていきますかってあるでしょ。原町区では農家の半分の人が農業を続けたいと思っているけど、残り半分の人はやめたい、迷っていると答えているの。おばあちゃんはどう?  
祖母:できればやりたいなあ。畑や田んぼを荒らしておくのはご先祖様に申し訳ない。でも、三ヶ月新潟に避難してるうちに体が弱ってしまった。三年も休んで、少しは作っているけどな。幸子には食べさせられないし、体のあちこちも痛いし……

○そこへ、仮設住宅を見回る母が帰ってくる

幸子母:幸子、あのおばあちゃんのこと覚えているでしょ

幸子:えっ。

幸子母:ほら、あの、仮設住宅で会ったおばあちゃん

幸子：ああ、私が仮設におじゃましたときのね。どうかしたの？

幸子母：死んじゃったんだよ

幸子：どうして！

幸子母：小高町から仮設に避難してきたんだけど、一人暮らしで持病があったらしいよ

祖母：小高町にいたら近所の人とお茶のみ話して暮らせていたのにねえ

幸子母：そうだねえ。こうやってお年寄りや弱い人にしわ寄せがいつてしまう

幸子：そうなんだ……

…（中略）…

〈7場〉

柱 宿題が出されて数日経った教室で

…（略）…

先生：で、幸子ちゃんはどうかしたの？

幸子：はい。いろいろ聞かされて迷っちゃいました。でも、つい昨日おととい、お母さんが嬉しそうに帰ってきたんです。大きな花束をもって。「何それ」って聞いたら仮設の人たちにもらったって言っていました。お母さんの誕生日を覚えてくれていてプレゼントしてくれたんです。過労死とか、お母さんの仕事は辛いことが多いけれど、お母さんは自分ができることを生き生きとやっている。

だから、私も大人になったら南相馬市の仕事に就こうかなって。でも、自分にも自分の夢があるし。まだ分かりません。

先生：幸子さんのお母さんがこうおっしゃっていたよ。「これまでの価値観が変わってしまったから、今を懸命に生きていってほしいって。それに、ここに止まるも、止まらないも幸子に任せたい」って。幸子さんは末っ子だから、ここにいてほしいと思っているんだろうけどね。

…（後略）…<sup>(36)</sup>

この5場・7場で、幸子さんは、実際に、幸子さん自身を演じた<sup>(37)</sup>。その後、この構成劇の実践は、6年生の3学期にかけて、NHKドキュメント番組に描かれた場面（父母・家族からの手紙、等）へと繋がって行く<sup>(38)</sup>。

## 6. 生活綴方の本質

現在、日本作文の会の常任委員会委員長という立場にある白木は、同会の『会員通信』No.141(2016年11月30日)に、2017年度福島大会現地実行委員会委員長として、「2011・3・11 あの日、あれか

ら そして今、『共に生きる』道を切り開く」という題の文を寄せている。最後にそのことばを引く。

生活綴方は、子どもたちの生活表現を書きことばの指導を通して、生き方にまで高めていくという本質をもっています。そのために、生活の現実・事実を主題化して自分のことばでありのままに綴らせ、子どもたちが現実の生活を直視し、より深く認識するとともに、自分の生き方を確かなものにしていくことを実践の根幹としてきました。

二〇一一年の東日本大震災・東京電力福島第一原子力発電所事故は、この生活綴方の「本質」を改めて問い直し、いのちを慈しみ、人が人らしく生きることを教育の大きな課題として私たちに突きつけました。しかし、あの過酷事故から5年以上の月日が経つ今、福島の社会や教育は「復興」「未来（希望）」「絆（つながり）」「学力向上は復興の要」といったことばで語られ、メディアも「復興してきた福島の元気な姿を見せる」として、復興のために多くの人々が携わり努力してきたことの陰で、人々や子どもの苦悩や生活の困難さを置き去りにしてきました。

果たして、福島のありのままはどうなっているのでしょうか。ふるさとを追われ散り散りばらばらなまま避難している十万人を超える人々。「避難指示解除」（原発から20～30km圏内に居住）を言われ、安全の十分なあかしもないままに地域に戻される人々。事故当初から「避難の必要対象外」として、医療や看護などが不十分な環境での生活を強いられてきた人々。放射線の影響を機械的に線引きされたことによる、保証金などが産み出した分断と差別、地域崩壊。地域ばかりか、家族の間の「避難するか」「残るか」のギリギリの選択でさえ尊重されず、悩み、不安に駆られながら暮らしている人々。これら親の苦悩を引き取りながら、避難先で、避難指示解除区域で、不安やストレスを抱えて暮らしている子どもたち。元の学校に戻ったにもかかわらず、過剰反応を示し崩れていく子。そして、管理・統制・競争の支配する現場で、学力向上に駆り立てられる教職員。

…（中略）…

はじめに述べたように、書くということは、言い換えれば、自己を取り巻く生活世界を自分のことばで表現することを通して、自然や社会、人間をより深く認識することです。また、書かれた作品を読み合い、自己や他者の世界を共有し、互いに認め合い、つながりあうことです。書くことは、単なる道具ではなく、より人間的な表現であり、子どもの人格形成を目的とするそのものです。今、福島という特異な状況下にあって、子どもが何を求め、どういう困難と向き合っているのか。何に逡巡し生きる道をどう開こうとしているのか。子どもが生きることへの葛藤や悲しみ、不安や寂しさ、そして希望に、信頼できる大人として、その声を聴き取り、寄り添って

いくことが何よりも求められています。…(略)…<sup>(39)</sup>

「共に生きる」ための教育実践への方途、そして「共に生きる」社会への念願を、生活綴方実践の可能性として、白木は重く提示しているように思う。ここに、白木が3・11後、2011年度からずっと問うてきた、「分かりあえばきっと力になる」ということばの意味を、重ねて考えたい。

## 7. おわりに

以上、白木の論考や子どもの作文などから、白木の展開した教育実践の事実と、氏の実践への意思・意志の一端の実際を確かめるべく、諸資料等から引用・記述し、跡付けながら探ってきた。3・11の「あの日からの問いかけ」を白木がどうとらえ考え、それを教育実践の中でどう引き受け、総合学習実践等の展開のなかで、「学び」としてどう実現しようとしてきたか、そしていかなる意志を以ていかなる実践を切り拓いてきたか、その一側面に迫ろうとしてきた<sup>(40)</sup>。

ここからは、総じて、原発災害のもたらした甚大な困難に向かう教育実践の実像と、実践の前進・実質化に内包される厳しさ、そして社会問題としての原発問題の大きさ、その落とす影の深刻さが、事実として知れる。その厳しさの一方、その営みの過程からは、白木次男という一人の小学校教師の、地域の教師としての生き方、教育実践への取り組みへの苦渋の思いと模索、見通しが持てない中での格闘の足跡、その中での、変わらぬ一筋のぶれない芯のような思念が、明らかに見える。

そしてとりわけ、「身近な家族の息遣いをリアルにとらえさせ」、「学んだことを、暮らしの中でリアルにとらえ」、「実感的にわかる」プロセスをつくり、どう「生きる」かを問い考えることに迫ることを貫く、白木の一連の生活綴方・学級文詩集実践の展開は、今後、従来の教科教育の在り方への問い返しや反省も含め、「学び」の質や、学習指導をどうとらえ実践するかを根源的に問う、深く豊かな示唆を内包している。現実を書き綴る

ことが、学びを豊かでリアルなものにし、その学びを深く「生き方」にまでつなげる導きの糸として、再び地域の社会的現実をとらえ返す眼を育てる土壌となる。

加えて、津波被災の数年後、そして原発複合災害のさ中であって、生活綴方教師としての白木の、このリアリズムに徹する実践には、「生活綴方」という教育思想・実践の価値、その強みと重みを認めることができる。学級文詩集実践を基軸に据え、地域の現実からものを見ることを励まし、目の前の現実の「リアルな姿から自分の考えを鍛えて」いき、生活から現実をとらえ学び「生き方」を考える力、子どもの実感的な生活認識・社会認識を育て、人間らしさとは何か、平和・いのちの意味を希求する基盤を養っていくという、明瞭な志向を有する白木の実践から、地域・社会の現実の中での、己の「生き方」を、そして未来の社会（の变革）への展望を、教育という「希望」のなかで問い学ぶことを求める、教育の原理の一つの典型（原型）が読み取れまいか。

ではこの白木の実践を支えてきたものとは何であったか。それは一つは、白木自身のこれまでの長い実践の積み重ねの足跡<sup>(41)</sup>、そのサークル等での学びの蓄積等が、大きな意味を持っていたであろう。その実証的な検討を以後の研究課題の一つとしたい。そしてあわせて白木の、昭和戦前期以来の北方性教育運動を継承する「北方教師」としての実質やその立ち位置についても、あらためて焦点を当てて深く検討してみたい<sup>(42)</sup>。

\*本稿作成にあたり、白木次男氏には、度重なる聴き取り調査に丁寧に応じいただき、また、学級文詩集等の貴重な第一次資料等を拝借させていただくなど、多大な示唆と教示、配慮をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

\*本稿はJSPS 科研費 JP26381005の助成を受けたものである。



## 註

- (1) 元来、多様で重層的な側面を持つ白木氏の一連の教育実践の全体を分析しようと試みる場合、多面的多角的な、複数の側面からの検討が必要であるが、ここでは総合学習の実態とその展開に的を絞って考察を試みたい。なお、白木次男氏が3・11震災後に書いてきた論考（著書、論文）の一覧、及び、白木実践・白木氏の論稿・著書の内容等に関する先行研究の書誌については、拙稿「3・11東日本大震災後の東北3県沿岸被災地等における地域教育実践の展開について―現地の教師等が書き綴った教育関係雑誌論稿等の文献一覧の作成から―」（岩手大学教育学部社会科教育科『岩手大学文化論叢』第9輯、2017年2月）166-167及び171頁を参照されたい。
- (2) 白木次男『〈ドキュメント 津波と原発災害の地、福島で〉それでも私たちは教師だ―子どもたちと共に希望を紡ぐ―』本の泉社、2012年7月。
- (3) 白木次男氏からの聴き取り調査による（2017年2月、於：福島県相馬市内）。
- (4) 白木次男「〈長編実践その1〉子どもたちの声に聴き、共に希望を紡ぐ―あの日からの問いかけ―」（日本作文の会編『作文と教育』No828、2015年8月）48-49頁。
- (5) 白木次男「〈東日本大震災をおもう 第7回〉真実を教えないのは罪」（全教編『クレスコ』No130、2012年1月）10頁。
- (6) 白木次男「〈特集『原発・放射能』問題をどう教えるか〉福島原発事故の真実を教える意味」（『クレスコ』No135、2012年6月）22頁。
- (7) 同上論考、22-23頁。
- (8) また白木は、2012年8月の論考の中で、こう述べている。「…（略）…私たちはどこに立つのか。／私は、教育のあるべき姿や子どもたちのあるべき姿に立つのではなく、目の前の子どもの現実に立って考え、抱え込んでしまった不安や恐れ、悲しみの感情をすくい取り、共有することをまずしなければならないと思いました。正解とはいいいきれないのですが、少なくとも私はここに拠って立とうと迷わずに思いました。／これは生活綴方、なかでも東北の生活綴方の原点でした。戦中、戦後、東北の生活綴方教師は、過酷な環境、生活の中で生きる子どもたちに、現実を鋭く見つめさせ、書き綴らせてきました。このなかで大切にしてきたことは、子どもの『生活台』に立つという考えでした。」（白木次男「私たちは、どこに拠って立つのか、そして、『読み合う』ことの意味」『作文と教育』No.792、2012年8月、8頁）。ここには、子どもの現実（東北の「生活台」）に立つ「生活綴方」、北方性教育運動の思想が明瞭に見られる。なお、関連して、拙稿「原発災害のなかの生活綴方実践と『社会科学』―白木次男氏の報告から考えること―」（教育科学研究会編『教育』No824、2014年9月）を参照されたい。
- (9) 白木次男「〈特集『原発・放射能』問題をどう教えるか〉福島原発事故の真実を教える意味」（『クレスコ』No135、2012年6月）23頁。
- (10) 筆者（土屋）は2014年2月、教科研福島フォーラム（於：福島大学）という研究会に参加し、白木氏の実践報告を聴いた。当日、報告の中で白木氏から回覧に付された総合学習のワークシート（本稿で後掲の【資料2】）を見ると、そこには氏のこれまでの諸論考の見解・主張や、報告レジュメの中心論旨はほぼそのままのことばが記入されていた。筆者は率直にそのことに驚かされた。白木氏のこの報告のなかのことばは、子どもに向けたことば（子どもを、そしてその学びへの「意志」を励ますことば）でもあったのである。氏の、「子どもの声に聴き」、「伴走」する姿のその内側にある、強烈な指導性への意志を見る思いがした。当時、白木氏が「最近「総合学習」へと進み入った」ということをそのときに知り（学校を異動し担任を持ったことで可能になったという条件もあったであろうが）、先に引いた、論考にあった「社会科学としての切り口」という言葉の大きな意味を思った。
- (11) 白木次男「『あの日からのおくりもの』―南相馬・子どもの声<sup>(ママ)</sup>を聴きともに生きる―」（教育科学研究会編『講座 教育実践と教育学の再生 第5巻 3・11と教育改革』かもがわ出版、2013年12月、所収）36-37頁。こうした文脈から考えると、白木の一連の震災後の教育実践の奥底には、幾重にも重なる怒りと憤りが一貫してあるように思える。
- (12) 村山士郎「『解説』にかえて 日本の教師たちへのメッセージ―子どもたちの恐怖・悲しみ・苦悩に向きあうということ―」（白木次男著『それでも私たちは教師だ―子どもたちと共に希望を紡ぐ―』本の泉社、2012年7月、所収）参照。
- (13) 白木次男氏からの聴き取り調査による（2017年2月）。
- (14) これらの、学級詩文集に載っている作文の一部の詳細、学級の子どもの家族離散や転校時の現実、これら作品への白木の見取り・とらえ等については、次の白木の連載実践記録等から具体的に知ることが出来る。白木次男「長編実践 子どもたちの声に聴き、共に希望を紡ぐ」（日本作文の会編『作文と教育』No828～No832、2015年8月～12月、4回連載）、白木次男「生きづらい社会にあって 子ども・父母・地域と繋がる」（『作文と教育』No836、2016年4月）、白木次男「〈特集1『悲しみ』と教育 被災地で、水俣で、〉わかり合えればきっと力になる」（『教育』No854、2017年3月）。
- (15) 学級文詩集「明日に向かって」No.1、2013年4月16日。
- (16) 白木次男「〈長編実践その4〉子どもたちの声に聴き、共に希望を紡ぐ 『ずっと言えなかった』―福島、親子の手紙 NHK TV から―」（『作文と教育』No832、2015年12月）。
- (17) 白木は同論考の中でこう記している。「…（略）。大熊町教育長・双葉郡教育長会会長・武内敏英氏の共著書からの引用）…この武内氏に代表される考え、責任の所在をひとくりに「人間（日本人）」としてしまふところに、原発過酷事故と原発問題を曖昧にさせ、事の本質を見誤らせてしまうタブーを潜ませてしまふ

- のだろうと危惧する。」(白木次男「〈シリーズ震災と教育 第6回〉福島のと復興、復興後の教育を考える」(『季刊 人間と教育』No82、2014年6月、110頁)。
- (18) 白木次男「〈シリーズ震災と教育 第6回〉福島のと復興、復興後の教育を考える」(『季刊 人間と教育』No82、2014年6月) 109-111頁。
- (19) 白木次男「(長編実践その2) 子どもたちの声に聴き、共に希望を紡ぐ『かくされた悪を注意深くこぼむ』—賢明に生きる子どもにしたい—」(『作文と教育』No829、2015年9月) 52頁。
- (20) 同上論考、55頁。
- (21) 白木次男氏からの聴き取り調査による(2017年2月)。
- (22) 白木次男氏からの聴き取り調査による(2017年2月)。
- (23) 白木次男氏の教育実践記録ノートから引用。
- (24) 白木次男「子どもたちの生活と表現の魅力」(『作文と教育』No848、2017年4月) 6-7頁。その後のこの奈緒さんの作文(作品)の展開や、学級での暮らしぶり、彼女の個性やその成長の白木の見取り、等については、同論考を参照。なお、白木はこの引用文の後、こう続けて書いている。「…(略)…なお、ここでは[この論考の中では詳しく…引用者註]ふれませんが、原発被害や教育の貧困化の問題は、社会的な責任が問われる問題です。原発事故を例にするならば、『なぜこの地に原発は立地されたのか』『原発は本当に必要なのか』『そのことで引き起こされた被害に対して、誰が責任をとらなければならないのか』など、社会的な問題として考えていく視点が必要です。」(同上論考、8頁)。なお、付言すれば、この奈緒さんの感想には、白木が読み取った「不安」や「自信の持てなさ」とともに、疑問あるいは疑念、そして社会への問いと批判的な眼差しもある(含んでいる)、というようにも読み取れるように思われる。
- (25) 白木次男「(長編実践その3) 子どもたちの声に聴き、共に希望を紡ぐ—構成劇『Dreams come true together この星に生まれて』—」(『作文と教育』No830、2015年10月) 52頁。
- (26) 白木次男氏からの聴き取り調査による(2017年2月)。
- (27) 白木次男「(長編実践その3) 子どもたちの声に聴き、共に希望を紡ぐ—構成劇『Dreams come true together この星に生まれて』—」(『作文と教育』No830、2015年10月) 52頁。
- (28) 白木次男氏からの聴き取り調査による(2016年1月、於：石神第一小学校6年白木学級・教室)。なお、白木氏は、この「わかる」ということについて、次のように述べている。「この「わかる」とは、頭の中で分かる、概念的に、あるいは観念的に分かる、という、それをくだいて、より生活実感として、分かる、ということ。「概念くだき」として、綴方教育でずっと昔から言われてきたこと。それを私は「生活に返してやる」、実生活に戻して、改めてリアルにとらえる、と
- いう言い方をしてきたのだと思う。「概念くだき」とは、頭の良い子の作文に見られるような概念的、観念的な作文、きれいに書かれているが、感動を呼ばない作文、物事を傍観的に書いているから、生活と自分に距離があるので、そこをどう埋めてあげるかが、課題となったこともある。調べ学習でのレポートなどは正に切り貼りの概念だらけのもの。この「課題」については、課題①：もっとよく見て、もっとよく思い出して、もっと詳しく書いて、と強要するような書かせ方、課題②：物事に深く関わろうとする生活意欲を励ますことによって、生活を耕すことによって、克服しようとする考え、の2つがあった。東北では、私や津田(八洲男)、橋本(誠一)、高橋(新一)先生は、この第二の課題の考えに立ちました。]
- (29) 学級文詩集「風は野をわたる」No.2、2014年5月8日。
- (30) 学級文詩集「風は野をわたる」No.3、2014年5月22日。
- (31) 白木次男「子どもたちと共に『希望』を紡ぐ—四年目の春に—」(日本子どもの本研究会編『子どもの本棚』2015年3月) 24-25頁。
- (32) 学級文詩集「風は野をわたる」No.4、2014年6月30日。なお、同文集の中では、この作品への白木からの評・コメントは付されていない。
- (33) 白木次男「子どもたちと共に希望を紡ぐ—原発被災地の子どもたち—」(「書き綴り読み合い、共に育つ日本作文の会2017年福島大会プレ集会」資料、2016年11月12日、於：福島県教育会館) 4頁。
- (34) 同上資料、3-4頁。なお、ここに白木が記している「意思決定権」という見解・把握については、金子真理子氏の論文「子どもの『意見表明権』の社会的意義—二つの教育実践の分析をもとに—」(『子ども社会研究』第21号、2015年6月) から示唆を受けたという(白木次男氏からの聴き取り調査による。2017年2月)。
- (35) なお、白木には、この構成劇の構想過程で、次のような、示唆を受け思念した経緯があった。『空の村号』(篠原久美子作)の脚本を同年夏の東北民教研で紹介され、「生活綴方的な作品、と興味深く読んだ。」「厳しい現実を目の当たりにしたとき、安易な夢にすがりたくなるが、その間にあったことをなかったかのように隠そうとする悪が言葉巧みに忍び寄った。ならば直截に現実を突きつけた劇を作り上げようと思った。子どもたちがこれまでに原発被害に向き合い書きあげた作文。祖父母や父母が語ってくださった思いや願いをありのままに劇にして発信したいと考えるようになった。これは、子どもや一学級で解決できる問題ではなく、地域や社会が責任を持つべき問題だが、子どもたちは勉強してきた。私たち大人、地域や社会は、子どもたちの問いに答えなければならない。この先を希求するために。そう思った。」(白木次男「(長編実践その3) 子どもたちの声に聴き、共に希望を紡ぐ—構成劇『Dreams come true together この星に生まれて』—」(『作文と教育』No830、2015年10月、52-53頁)。
- (36) 構成劇、脚本(冊子)より引用。なお、同上論考、53-55頁、参照。

- (37) 白木氏に懇願し、筆者（土屋）もこの全校学習発表会を石神第一小体育館の末席で参観させていただいた。その時、幸子さんが壇上で、緊張の面持ちながらもゆったりと自信を持って演じていたように見られた姿が、特に一つ、強い印象として残っている。
- (38) NHK 地方発ドキュメンタリー「ずっと言えなかった～福島 親子の手紙～」(2015年3月24日放映)。
- (39) 白木次男（福島大会現地実行委員会委員長）「2011・3・11 あの日、あれから そして今、『共に生きる』道を切り開く」（日本作文の会（編集・発行）『会員通信』No.141、2016年11月30日）1-2頁。
- (40) ただし、本稿には、特定の狭い関心から、記録や資料の一部を抜粋し部分的に引用したところに一定の限界がある。白木の教育実践の全体像・実像の捉え損ね、それ故の過誤・誤解の可能性を懼れる。以後、氏の教育実践への詳細な検討を多角的に重ねてゆくことを試みなければならない。
- (41) 3・11大震災より以前、白木が書いた実践記録・論考には、例えば、白木次男「書かせることをせかせないで心を開き合うことから」（『作文と教育』1993年4月）、白木次男「子どもたちと凶作に向き合う」（『教育』1994年11月）、白木次男「作文に子どもの内面を読む」（『作文と教育』1996年4月）、等々がある。
- (42) 関連して、拙稿「地域に生きる『生活者』としての子どもと学力—北方性教育運動の視点から—」（教育科学研究会編『教育』No.810、2013年7月）を参照されたい。